

幻想と幻滅

「幸運の微笑」の一研究

Illusion and Disillusionment A Study of 'A Smile of Fortune'

藤原 洋樹

Hiroki FUJIWARA

ジョウゼフ・コンラッドの短編集『陸と海の間』に収録されている短編小説「幸運の微笑」は一般に批評家の評価は低い。作者にはこの作品をロマンスにしようとする意図が伺えるが、作品の底流に流れているアイロニーによって、その意図は損なわれている。又語り手を設定しておきながら時々作者自身が語り手を飛び越えて語っているのは、語り手という技法上の失敗であると言える。著者がこの作品を読んで気になる点は、語り手である主人公の船長は薄幸の少女アリス・ジャコブスに強く魅かれるが、全く唐突に彼女に対する関心を失って彼女のもとを去ってしまうという点であり、この船長の気持の変化は、彼がアリスに対して作り上げていた「幻想」が、彼女の変貌によって破壊され「幻滅」という結果に終わったからであると思われる。

序論

ジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) は、ポーランド人であり、20年間の船員生活の後小説家になり、ポーランド語、フランス語に続く第三の言語としての英語を駆使して多くの小説を発表したが、これは正に驚異的なことであると言える。彼の作品は船員としての経験をもとに海と船を背景にした男達の世界を描いたものが多いが、彼に貼られた「海洋小説家」というレッテルとは異なり、彼は彼等の人間としての強さの裏に隠れた人間としての弱さ・苦悩を探求し、批評家リーヴィス (F.R. Leavis) の『大いなる伝統』(*The Great Tradition*, 1941) にもイギリス小説の伝統に連なる作家として認められている。

...Conrad is among the very best greatest novelists in the language—or any language—¹⁾

千葉科学大学薬学部薬学科

Department of Pharmacy, Faculty of Pharmacy, Chiba Institute of Science

(2007年9月27日受付, 2007年12月12日受理)

19世紀の終りから20世紀の初めにかけて合わせて31の長編、短編、戯曲、および多くの書簡を残しているが、彼の小説家として着目すべき点は、その小説技法にある。『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897) の「前書き」の中で、彼は「自分が成し遂げようとしている仕事は、書いた言葉の力で読者に聞かせ、感じさせること、特に見させることだ。」

My task which I am trying to achieve is, by the power of the written word to make you hear, to make you feel—it is, before all, to make you see. ²⁾

と書いているように、小説家としてのコンラッドは読者が彼の作品を読んでその光景をまざまざと目の前に思い描けること、さらに読者に事物の真の姿を見させることを目指しており、新しい手法を編み出しこそしなかったが、小説の表現形式を発展させ小説の「形式」と「内容」の融合を絶えず模索しながら作品を書き続けていた。

彼の短編小説「幸運の微笑」('A Smile of Fortune') は、*London Magazine* の1911年2月号に掲載された後、1912年に「秘密の共有者」('The Secret Sharer') と「七

島のフレイア」(‘Freya of the Seven Isles’)とともに、短編集『陸と海の間』(‘*Twixt Land and Sea*’)として J.M.Dent 社から出版された。この「幸運の微笑」は、彼の作品には珍しく男女の愛という主題も含まれていたので一般読者の受けは穏当ではあったものの、批評家の評価は低く詳細に論じたものは数少ない。

筆者が「幸運の微笑」を読んで最も気になるのは、語り手の若い船長がアリス・ジャコブス(Alice Jacobus)という18歳の少女に強く魅かれながら、全く唐突にその気を失って彼女の家を去っていくという点である。この小論ではこの気になる点を出発点として、この作品の文章の特徴を調べ、最終的に作者コンラッドはこの作品を通して何を言いたいのかを探ってきたい。

本論

(1)語り手

「幸運の微笑」は、主人公である無名の若い船長が語るという形式を採っている。コンラッドの小説の語り手としては、『ロード・ジム』(*Lord Jim*,1900)、『物語：青春と二つの他の話』(*Youth, A Narrative, and Two Other Stories*,1902)に収められた「青春」(‘Youth’)と「闇の奥」(‘Heart of Darkness’)の二つの短編、そして『チャンス』(*Chance*,1913)の四つの作品に登場するコンラッドの分身とも言えるマーロウ(Marlow)が有名である。コンラッドはマーロウを小説の語り手として登場させ自分と題材の間に言わば一つのフィルターを置くことによって、題材との適切な距離を保つことが出来、小説家として成功したとされている。ただ読者としては、そのマーロウというフィルターを通して語られる物語を理解するためには、かなりの想像力が要求される。

語り手の船長は明らかに読者を意識して語っている。船長が60日間の航海の後、サトウキビの栽培を主要産業にしている「大洋の真珠」(*Pearl of the Ocean*)と呼ばれるモーリティウス(Mauritius)島に砂糖を求めてやって来た翌朝、彼は船上でジャコブスという人物の訪問を受ける。彼は船主の手紙の中で、傑出した商人であり又用船者でもあるジャコブス氏とうまくやるように指示されていたので、当然その本人だと誤解するが、実は船主が会うことを勧めていたのはアーネスト・ジャコブスであり、船長の船を訪問してきたのは弟の船具商をしているアルフレッド・ジャコブスであった。ジャコブスは船長に港の世間話をしてくれるが、その時船長は「ご想像どおり私は耳を皿のようにした」

As you may imagine I opened my ears very wide., p.10

と、あなた即ち読者に語りかけている。

船長がジャコブスに勧められるまま彼の店を訪れ、彼にジャガイモを10トンか15トン買わないかと言われた時、船長は「(現実的なことを申し上げますが)ジャガイモはとても腐りやすい商品なんです」

...and potatoes (excuse these practical remarks) are a highly perishable commodity., p.31

とカッコつきで読者に言い訳しているが、語り手を飛び越えて作者が読者に言い訳している。又ジャコブスが近くに自分の家があり、家には娘だけしかいないと言った時、船長は話を1・2週間前に戻すことを読者に断る。

It is difficult to set everything down in due order; so I must revert here to what happened a week or two before., pp.32-33

この短編はこれまで時間の流れに沿って語られてきているが、作者はここで始めて最後のフラッシュバックを用いて、ジャコブスの今は亡き妻との間に出来たもう一人の娘と結婚している港の医師の話を船長に思い出させる。語り手がわざわざ読者に断って話を過去に戻すのは一見分かり易いように思われるが、読者は語り手の存在と語り手の背後に見え隠れしている作者の存在を強く意識させられ、物語から注意を逸らされるようで、フラッシュバックの手法としては面白味に欠ける。

船長はジャコブスに連れられて彼の家に行き彼の娘のアリスを紹介される。ジャコブスは、やり残した仕事を済ましてくると店に戻ってしまい、薄物しか纏っていないアリスと二人だけ後に残された船長は気まずい思いをするが、その後すぐ「そのような気まずさは狭い偏見に捕われない人間には簡単に乗り越えられる」

...but that sort of embarrassment is got over easily by a mind not enslaved by narrow prejudices., pp.44-45

と述べている。知り合ったばかりで若い男が薄着姿の若い女と二人だけにされれば、うろたえるのは当たり前のことであるのに、人生の全てを知り尽くした年寄りのように、「狭い偏見」という言葉でその気持を排除できる船長は語り手としてとても信じられないし、又語り手にそのようなことを言わせて澄ました顔をしていられる作者も信じる気にはなれない。作者が語り手を飛び越えて語っていると考えざるをえない。船長はその夜ジャコブス家で夕食を共にするが、アリスはベランダから動こうとしない。彼女は親類に当たる初老の女性の監督の下に置かれている。彼はこの女性から「自分達の平和を乱さないでくれ」(‘Leave us in

peace?”, p.49)と激しい口調で言われるが、彼はこれに恐れをなして、これを最後にジャコブス家には行かなかったと読者が思われたら、「それは人間性について良くご存じない」

...you would show an imperfect knowledge of human nature..., p.49

からだ、これ又人生の全てを知り尽くした年寄りのような発言をする。ここでも明らかに年取った作者が若い語り手を飛び越えて語っている。語り手を設定しておきながら作者が語り手を飛び越えて自ら語るの、語り手が語り手として相応しくないということを表わしているが、そのような語り手として相応しくない語り手を登場させた作者の責任が問われることになるだろう。『西欧人の目の下に』(Under Western Eyes, 1911)においても時々作者が語り手の語学教師を飛び越える形で語っているが、この短編とは大分事情が異なり、作者が語り手の選択を誤ったというわけではない。³⁾

アリスは船長が悪い人間だと信じさせられていて、船長が自分を何も無い部屋に閉じ込めても自分の髪の毛で自殺できると言う、船長は「我々同胞の頭の中にはどんなとんでもない考えが浮かぶのか推測できない」

It is ever impossible to guess at the wild thoughts that pass through the heads of our fellow creatures., p.66

とあまりにも陳腐で無意味な感想を述べている。船長の語り手としての自信の無さが言わせた感想のように思われる。

船長はモーリティウス島を去って、「これは港の物語なので航海のことについて話すのは私の目的ではない。」

This being a harbour story it is not my purpose to speak of our passage., p.82

と読者に断り、自分の意志に反してジャコブスに買わされたジャガイモが干害ということもあり、莫大な利益を上げたことだけを述べているが、小説の技法の点から見ると、語り手がいちいち読者に断るのは読者に媚びた大衆小説並みのやり方で望ましくない。

「幸運の微笑」は、主人公の若くて経験も浅い船長が自分自身のロマンスの経験を語る形を取っている。彼は読者を意識し読者に直接話しかけているが、彼の背後に作者の姿が見え隠れして時々若い語り手を飛び越えて年取った作者が語っている。

明らかに作者は語り手という小説技法において失敗している。

(2) ロマンスとアイロニー

この作品をロマンスにしようとする作者の意図が所々に伺えるが、作品の底流にはアイロニーが流れており、そのため作者の意図が損なわれている。題名の A Smile of Fortune は、語り手の船長がアリス・ジャコブスに強く魅かれながらも、結婚という形で彼女に対する責任を取らなかったことへの後ろめたさから、彼女の父親であるアルフレッド・ジャコブスから押し付けられた多量のジャガイモを持ち金全てをはたいて買ってしまいが、そのジャガイモが干害という状況もあり、主人公に思わぬ利益をもたらしてくれたことを指している、この題名自体作者の大いなるアイロニーが含まれている。

コンラッドは1888年の9月30日から11月22日までモーリティウス島にオタゴ号の船長として滞在し、そこである女性に求婚するが、彼女は既にほかの男性と婚約しており2ヶ月後に結婚することになっていた、当然のこととして断られる。この「現実のロマンスの解毒剤として、フィクションのロマンスが書かれた」

...a fictional romance was created as an antidote for the real one,...⁴⁾

とすれば、そこにアイロニーが入り込んでくるのは避けられないことだと思われる。

主人公の船長はモーリティウス島のロマンティックな美しさに魅かれる

...and very soon, I became entranced by this blue, pinnacled apparition, almost transparent against the light of the sky, a mere emanation, the astral body of an island risen to greet me from afar., p.3

が、その感動もすぐに自分には船長として砂糖を購入するという仕事待ち構えているという現実が邪魔される。この作品にはロマンスと商業との対立があり、「私の商業上の無知」(my commercial innocence, p.6)をはじめとして commercial という形容詞が多用されていることは、商業がロマンスを阻むアイロニーとしての機能を与えられていることを示している。

ジャコブスが自分の庭に咲いていた花を摘んできたと言って船長に花束を差し出し、船長が顔を赤らめるような

I assured him jocularly, as I took my place at the table, that he made me feel as if I were a pretty girl, and that he mustn't be surprised if I blushed., pp.22-23

場面は、以下のようにジャコブスが船長の性的傾向をテスト

トしているのだろうか。

Jacobus's pointed insistence that the captain smell the flowers that he has brought aboard constituted his way of testing whether the captain is a homosexual or a potential suitor for his socially ostracized bastard daughter.⁵⁾

そうではなく、花束というロマンティックな物を媒介として自分の商売をうまく運ぼうとする商売人としてのジャコブスの老獪さを表しているとともに、この短編をロマンスに仕立てようとする作者の意図が暗示されていると思われる。

ジャコブスが兄アーネスト・ジャコブスのことを、「彼は規則正しい習慣を持っている人だ」

“He's a man of regular habits.”, p.33

と評し、船長の知り合いの男もアーネストのことを「非常に立派な独身男性であり、彼に関しては皆に知られたスキャンダルは全くなく、彼の生活は全く規則正しい」

A highly respectable bachelor. But there had never been open scandal in that connection. His life had been quite regular.,p.34

と評しているが、彼の傲慢不遜な態度や現地人の女との間に出来た息子に対する虐待を知らされると、**regular** ,**respectable**, **scandal** という3つの単語には作者のアイロニーが含まれていると感じる。30ページ後に、船長はアリスに彼女を監督している初老の女性以外に信じられる人がいないと言われ、今更ながら彼女が「立派な共同社会の判決を受けて、頼る人もなく精神的孤独の状態に置かれている」

...very helpless and condemned to moral solitude by the verdict of a respectable community.,p.64

と感じる。アーネストを形容するのに使われた **respectable** が共同社会にも使われているが、自分のしたことに対して責任を取ったアルフレッドとその娘アリスに対して冷淡な共同社会がとても **respectable**とは思えず、この単語は二人を取り巻く共同社会を構成している住人達の道徳的墮落を暗示するアイロニーとして使われている。

アルフレッド・ジャコブスの家を訪問する前に船長は知人から彼の昔のロマンスの話を聞く。ジャコブス兄弟は一緒にパートナーとして商売をしていたが、どさ回りのサーカス団がやって来た時、アルフレッドが女性騎手の一人に

恋し妻子を捨ててそのサーカス団についてあちこち旅をする。結局その女に捨てられその女との間に出来た娘を責任を取る形で連れて帰って、自分の家に置いているということである。船長はジャコブスの過去のロマンスに魅きつけられると同時に、ロマンスはジャコブスの外見にそぐわないと思う。

The grotesque image of a fat, pushing ship-chandler, enslaved by an unholy love-spell, fascinated me; and I listened rather open-mouthed to the tale as old as the world, a tale ...which so ludicrously failed to fit the personality. What a strange victim for the gods!, p.36)

ここには外見(ジャコブスの現在の姿に加えて商業に携わっていることも含まれている)と内実(彼の過去のロマンスとロマンティックな気質)の齟齬が表わされているが、外見が内実を裏切るアイロニーとしての機能を果たしている。

船長はアリスに会って、彼女の緊張した人を寄せ付けないう頑なな態度にロマンティックな神秘性を感じる。彼女は丈の低い深々とした柳細工の肘掛け椅子にじっと座っているが、横顔が「絨緞の図案のようだ」(...like a figure in a tapestry..., p.43)と思い、又彼女が動かないでまっすぐ前を見ているので、「まるで何かの山車が庭を通り過ぎているのを眺めているようだ」(...as if watching the vision of some pageant passing through the garden...,p.43)と思う。語り手はアリスと出会ってから like...と as if...という直喩を頻繁に使用していて、これは語り手がアリスという娘について作り上げた自分の幻想というロマンスの世界にのめりこんでいるということを表わしていると思われるが、深みに欠ける内容に較べてあまりにも多く使用されているので、この直喩の多用もロマンスを損なうアイロニーとして働き、小説の技法としては成功していない。コンラッドは彼の傑作のうちの一つの作品である「闇の奥」でも直喩をかなり多用しているが、「闇の奥」の場合は作品の深刻な悲劇性に救われて、「読者に見させる」という彼の作家としての目標を達成させる手助けとなっている。

船長はアリスの不機嫌な態度にさえ悲劇性を感じ(...that stony, petulant sullenness had an obscurely tragic flavour.,p.50)、彼女に強く魅かれていると読者に感じさせる。船長はしばしばジャコブス家を訪れ忍耐強く彼女に話しかけるが、「彼女を気難しく悲劇的な自己から解き放つことが出来ない。」(...without succeeding once in taking her out of her peevish and tragic self.,51) アリスを悲劇のロマンスのヒロインに仕立てようと意図している作者コンラッドの姿が語り手の船長の背後に見え隠れしているが、読者は当然語り手の船長の視点を通してのみ彼女の外見と時々発する短い言葉しか知らされず、彼女の心の中を窺い知ることが出来ないのも、作者の意図がぼかされ

ているような印象を与えられる。

最終的に語り手の若い船長が、アリスという幻想を捨てて現実的なジャガイモで巨利を得るという馬鹿げた結末には、作者コンラッドの「独創的で斬新で深みのある小説を書きたいという気持と、人気作家になりたいという気持とのズレ」

...the split between Conrad's desire to write stories of depth, originality, and daring and his wish to be a popular writer...⁶⁾

が表現されているように見え、アイロニカルな結末だと言える。

(3) 幻想と幻滅

原因不明のままベンガル湾で船首像を失ったヒルダ号の船長は、失った船首像は20年間連れ添った何物にも替えがたい女性

...a woman in a blue tunic edged with gold, the face perhaps not so very, very pretty, but her bare white arms beautifully shaped and extended as if she were swimming...p.18

のような存在だったと述べ、さらにアルフレッド・ジャコブスが無情にも別の船首像の提供を申し出たことを伝え、自分は28年間やもめ暮らしをしているが別の船首像を取り付けるぐらいなら新しい妻を迎えたほうがましだと話す。このヒルダ号の船長の挿話は、商業は物と物との交換が原点にあるが、それに対して人と人との交換は如何か

It is the idea of interchangeability which makes commerce possible; we trade one commodity for another...

Can human relations be predicted on an economic matrix? Are human beings interchangeable and exchangeable?⁷⁾

という問いかけとともに、人間が持ち続けている幻想がその人間が生きていくうえでいかに大切なものであるかを暗示している。

セドリック・ワッツ(Cedric Watts)はコンラッドの小説に登場し、重要な役割を演じている女性を四つのグループに分けていて、アリス・ジャコブスはその三番目のグループである「服従させられているように見える女性達」(The seemingly subjugated)の中に「チャンス」に登場するフローラ・ドゥ・バレル(Flora de Barral)等とともに入れられ

ている。このグループの女性達の特徴は次のように定義づけられている。

These are women with unhappy pasts who are or have been so strongly dominated by men that their inner natures seem to have been crushed or suppressed, but who are yet capable of displaying surprising independence: they may strike back.⁸⁾

この女性達は薄幸の境遇にあるが、薄幸ゆえの「したたかさ」も身につけている。

この「したたかさ」と言う点が、船長がアリスに対して抱いていた幻想には相応しくない特徴であるように思われる。船長がアリスに惹かれた状況は、アンソニー船長がフローラに惹かれた状況に似ている。どちらの船長も孤独感を抱いており、相手の女性の孤独感に同情するとともに又その孤独感の隙に付け入るという印象を読者に与えている。この短編の船長がアリスに彼女に危害を加えるつもりは全く無く、父親のアルフレッドを恐れてもいないし、彼に何を強要されることも無い、と彼女の自分に対する恐怖を取り除いてやると、彼女は奇跡を見ているような変貌を遂げる。

To watch the change in the girl was like watching a miracle—the gradual but swift relaxation of her tense glance, of her stiffened muscles, of every fibre of her body. That black, fixed stare into which I had read a tragic meaning more than once, in which I had found a somber seduction, was perfectly empty now, void of all consciousness whatever, and not even aware any longer of my presence; ...,p.68

それを見て船長は自分の意に逆らっておこなった少し複雑な取引で裏切られたように

...as though I had been cheated in some rather complicated deal into which I had entered against my better judgment.,p.68

とを感じる。船長はこの時点でアリスに対して抱いていた気持が冷めてしまったように思われる。船長はもともと自分を警戒し緊張感に満ち溢れた彼女の姿から彼女に対する幻想を作り上げていたので、彼の存在さえ意識せず緊張感がとけて弛緩しきって「したたかさ」さえ感じさせる彼女の姿は、その幻想を裏切るものでしかなかったのではないかと思われる。その後船長は怒りのような熱情に駆られてアリスにキスの雨を降らせるが、父親のジャコブスに見られたことを察したアリスは靴を片方残したままベランダから

立ち去る。船長はジャコブスから再度ジャガイモの購入を勧められ、後ろめたさのある船長はその申し出をししぶ承知する。もう一度アリスに会いたいと思った船長は彼女の名前を呼び、薄暮の中で彼女が現れるのを待つ。「花壇は色のついた残り火のように輝き、強い香りが漂いまるでこちら側の半球の夕闇は寺院の薄暗さに過ぎず、庭は星の祭壇の前で揺れている巨大な吊り香炉のように思われる。」

...the flower-beds glowed like coloured embers; whiffs of heavy scent came to me as if the dusk of this hemisphere were but the dimness of a temple and the garden an enormous censer swinging before the altar of the stars.,p.76

アリスが再び現れるのを待っている間の船長の幻想に「死」のイメージが忍び込んでしまったことは、彼が彼女に抱いていた気持ちにも終りが来たことを暗示している。自分の頭の中で悲劇のヒロインとしてのアリスの幻想を作り上げてしまっている

...an illusion of depths and mysteries that are entirely created by his own idealization of her.⁹⁾

ので、彼女が現実に急にその幻想を破壊するような変貌を遂げると、彼にはそれについて行けないし又迷惑でさえある。

語り手の船長は「事実そのものを眺めずに、芸術的幻想—つまり想像力によって作り変えられた現実—を追う...」¹⁰⁾のである。

結論

語り手でもある主人公の船長はアリス・ジャコブスという不遇の少女の他人を寄せ付けない頑なな態度の中に神秘的な性的魅力を感じ、お城に閉じ込められた美しい姫君を救い出す「救助者」(rescuer)の役割を演じる王子としての自分の姿を幻想するが、彼にはその幻想を現実のものとする意志も無ければ、力も無い。世間に対して閉じたアリスの心を開かせながら、彼女のもとを去っていくこの主人公に対して、モラリストである作者コンラッドは船長職を放棄させるという贖罪の道を取らせている。

If he is to regain his integrity, the selfish sacrifice of one love demands the selfless sacrifice of another. The captain can do no less than quit “the ship I had learned to love”...¹¹⁾

語り手の船長は、アリスへの関心を失って彼女の家を去

って行く時、人生に対する虚無的な感想を漏らす。

I felt in my heart that the further one ventures the better one understands how everything in our life is common, short, and empty; that it is in seeking the unknown in our sensations that we discover how mediocre are our attempts and how soon defeated!, pp.79-80

コンラッドの小説には「理想」と「現実」との葛藤が一つの大きな主題として流れているが、「幸運の微笑」では「幻想」と「幻滅」という形で表現されている。人間が生きていくうえで自分の作り上げた「幻想」という理想を持ち続けていくことが不可欠ではあるが、「幻想」は現実にはさらされるとともろくも崩壊し、人間は例外なく「幻滅」という絶望感に打ちのめされる。ただこの船長の感想にもアイロニーが含まれているとすれば、作者コンラッドがこの作品で言いたかったことは、「人間にとって採るべき道は「幻滅」を感じながらも「幻想」を持ち続けるしかない」ということなのではないだろうか。

註記

「幸運の微笑」のテキストは *Twixt Land and Sea, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad, Vol.13, The Gresham Publishing Co. Ltd, London, 1925* を使用し、本文中にはページ数のみ記している。

- 1) *The Great Tradition*, F.R. Leavis, Chatto & Windus, London, 1955, p.226
- 2) *The Nigger of the “Narcissus” Typhoon*, The Gresham Publishing Co. Ltd, London, 1925, p.x
- 3) 『西欧人の目の下に』に於ける語り手の問題について、藤原洋樹、岡山理科大学紀要第18号B、昭和53年、21-29頁
- 4) *Joseph Conrad: A Psychoanalytic Biography*, Bernard C. Meyer, Princeton Uni. P., New Jersey, 1970, pp.74-75
- 5) *Conrad: The Later Fiction*, Daniel R. Schwarz, The Macmillan Press Ltd, 1982, p.12
- 6) *Conrad's Short Fiction*, Lawrence Graver, Uni. of California P., Berkeley and Los Angeles, 1969, p.vii
- 7) 'A Smile of Fortune' and the Romantic Paradox, Daphna Erdinast-Vulcan, *Joseph Conrad: Critical Assessments, vol.III*, ed. by Keith Carabine, Helm Information, East Sussex, 1992, pp.268-269

- 8) *A Preface to Conrad*, Cedric Watts, Longman, London and New York, 1982, p.169
- 9) *Joseph Conrad*, Roger Tennant, Atheneum, New York, 1981, p.188
- 10) 『ジョウゼフ・コンラッド—暗黒の形而上学をたずねて—』 フレデリック・R・カール著、野口啓祐・野口勝子共訳、北星堂書店、昭和49年、78頁
- 11) *Thorns & Arabesques*, William W. Bonney, The Johns Hopkins Uni. P., Baltimore & London, 1980, p.76

参考文献

- ・ *Romance and Tragedy in Joseph Conrad*, Walter F. Wright, New York/ Russell & Russell, 1966
- ・ *The French Face of Joseph Conrad*, Yves Hervouet, Cambridge Uni. P., 1990
- ・ *Joseph Conrad : The Imaged Style*, Wilfred S. Dowden, Vanderbilt Uni. P., Nashville, 1970
- ・ *Joseph Conrad: A Chronicle*, Zdzislaw Najder, Cambridge Uni. P., 1983
- ・ *Joseph Conrad*, Roger Tennant, Atheneum, New York, 1981
- ・ *A Joseph Conrad Companion*, ed. by Leonard Orr and Ted Billy, Greenwood Press, London, 1999
- ・ *Conrad's Measure of Man*, Paul L. Wiley, The University of Wisconsin Press, Madison, 1954
- ・ *The Conradian Conrad and Gender*; ed, by Andrew Michael Roberts, Rodopi, Amsterdam-Atlanta, GA, 1993
- ・ *Joseph Conrad: Achievement and Decline*, Thomas Moser, Archon Books, Hamden, Connecticut 1966
- ・ *Mimesis and Metaphor*, Donald C. Yelton, Mouton, The Hague・Paris, 1967
- ・ *Joseph Conrad: The Modern Imagination*, C..B. Cox, J.M.Dent & Sons Ltd, London, 1974
- ・ *Conrad: The Novelist*, Albert J. Guerard, Harvard Uni. P., Cambridge, Massachusetts, 1958
- ・ *The Strange Short Fiction of Joseph Conrad*, Daphna Erdinast-Vulcan, Oxford Uni. P., 2002
- ・ *Conrad's Politics*, Avrom Fleishman, The John Hopkins P., Baltimore, 1967
- ・ *Conrad: The Later Fiction*, Daniel R. Schwarz, The Macmillan Press Ltd, 1982